

るのが当然であるが、偏差図を外そうすることによって、地上の高低気圧の発達を予想する手段として使えることがわかる。

4. 結 び

現業で(9)式の計算まで行なって予想天気図を作ることは困難であるが、第1図と第2図は簡単に作ることができる。またこれらの偏差を追跡することは、現在現業で広く行なわれている。上層のトラフ・リッパの追跡、温度場の追跡と同じことであるが、それらの強弱や、発達衰弱などがより数量的に表現される利点がある。

低気圧の発達を論ずる場合、700mbの温度場より850mbの温度場に着眼した方がよいようにも考えられるが、850mb天気図は現在フアクシミリの放送にないので比較できなかった。

〔書評〕

野 満 隆 治 原著
瀬 野 錦 蔵 補訂

「新 河 川 学」 地 人 書 館

B 6 版, 318頁, 昭和34年 8 月刊, 700円

原著は野満博士が1943年に「河川学」という名前で地人書館から発行されたものである。「新河川学」は原著の体裁をそこなわないように、そして、戦後相次ぐ水害に対する対策の急務が叫ばれ、それに伴って急速に発達して来た水理気象学を新に入れ、洪水予報に関する新しい進歩も取り入れて述べてある。原著者の文体と、補訂者の文体の違いが目につき、序で補訂者が難しさを回顧しておられるが、むしろ、すっぱりと書き改めた方が読みよくなったのではないかと思われる。

内容は2編に分かれ、第1編河状論は5章あり、第1章「河水の涵養」には流域と水理気象学、第2章「河水の流動」では河水位、水面の形状、流速、流量、河口と感潮河川、第3章「出水」では洪水現象、洪水の防禦と計画洪水量、洪水の予報、河川出水の分析、第4章「河水の作用」では運搬作用、浸蝕作用、堆積作用、上名流、河水の温度と結氷、第5章「河谷」では河谷の大観、土柱・山崩れ・甌穴、滝、峡谷、沖積扇状地、河口州、河道の蛇曲、氾濫平原、河成段丘という節で構成しており、第2編「河谷発生源論」は、河谷の発生と河川の発達の2章に分かれて書いてある。第1編の内容を詳しく紹介したのは、われわれ気象技術者にとっても重要であり、興味深い事項が各節に分かれて論じてあるからである。

近時、相次ぐ水害によって災害対策の急務が呼ばれるようになり、気象庁、各気象台に対する一般の要望も、精度の高い警報を適時というように強まっている。気象技術者が気象学だけでそれになう予警報をするという

最後にこの試みに終始協力して頂いた下関地方気象台技術課の諸氏に感謝する。

文 献

- 1 大阪管区予報課有志訳(1957): 予報法則と予報技術.
- 2 織畑重太郎(1956): 東支那海における低緯度低気圧の発達, 日本気象学会誌, 気象集誌, Ser. II. Vol. 34, No. 4, 26-35.
- 3 佐々木良一(1955): 台風第15号の発達及び一般に低気圧の発達を予想することについて, 中央気象台研究時報, 7巻8号, 462-471.
- 4 岸保勘三郎(1956): 低気圧の発達とエヌトークの法および日本付近への応用, 天気, 3, 318-324.
- 5 粕谷光雄編(1957): 1955年12月25日~26日銚子沖で発達した低気圧について, 気象庁研究時報, 9巻7号, 485-498.

ことは不可能であり、そのための基礎知識を必要とする。具体的に洪水予・警報を發表することは、その外いろいろの問題があるが、この本に書いてあるような河川と洪水現象に関する一般知識は、是非とも身につけておく必要があるだろう。この外にも水理学に関する事はいろいろ出版されているが、内容からいって、われわれ気象技術者にはこの本が一番適切な本と思われる。定価が700円と値段が少しハズミ、ふところが痛むが、少なくとも地方官署で一冊は備えて読みあうようにすることが望ましい。

全体の文体を統一することが望ましいことについては前述したが、その外に術語にも、例えば上昇気流と昇騰気流というように、不統一な点が見られるし、校正誤りの箇所が相当目につくのが欠点である。すみやかに誤りは訂正して欲しい。もう一つ気になる所は121頁狩野川台風の雨量分布図と洪水時刻調査が、富士山測候所調査報告によるとなっているが、富士山測候所は富士山頂で気象観測をし、それを通報する測候所であり、このような詳細な調査をする所ではないと思われる。このような災害事後の調査は、調査費が十分なく、人手もなくて大変苦労するものであるが、この洪水時刻の推移は非常によく調査されており、貴重な資料である。困難な中を調査された人達の労苦が正しく詳価されることが必要だと思われるし、引用文献名に奇異の念をいだいたので、あえて注意した。評者の誤解であればお許し願いたい。

(気象庁予報部 奥田 穰)